

ブリュースフの『炎の天使』 —16世紀30年代のドイツの魔術的な世界—

柿 沼 伸 明

1. ブリュースフとロシア象徴主義

ヴァレリーイ・ブリュースフ (1873-1924) は、19世紀末～20世紀初頭の世紀の境に、『Tertia Vigilia (第三の警護)』や『Urbi et Orbi (都市と世界に)』等の詩集をひっさげて、革命前のロシア文壇で頭角をあらわした作家である。彼は、メレシコフスキイ (1866-1941)、バリモント (1867-1942)、ソログープ (1863-1927) と並び、前期ロシア象徴主義者の代表者とみなされている。前期ロシア象徴主義者に続いて登場したのが、後期象徴派3連星 (独 Dreigestirn) のヴァチェスラフ・イヴァーノフ (1866-1949)、ブローク (1880-1921)、ベールイ (1880-1934) である。

ロシア象徴主義とは、ルネサンス的な人文主義知を文学に昇華させた一大運動であり、19世紀末の西欧の文芸改革とも共鳴している。ロシア象徴主義者の全欧的な博識は、さまざまのものがあつた。最も広範で透徹した学識を有していたのが、おそらく Вяч.イヴァーノフであろう。その次に、メレシコフスキイとブリュースフが続く。メレシコフスキイとブリュースフの知識量は、甲乙つけがたい。ベールイもブロークも、上記三者の知的な高みに達することはできなかった。この点、1860～70年代前半生まれと80年代生まれの間には、越えられない教養水準の溝が横たわっている。

Вяч.イヴァーノフとメレシコフスキイは同年生まれで、両者とも宗教的な関心に創作の重点を置いた。他方、ブリュースフは西欧で起こった文学のモダニズム運動に深い興味を寄せており、前二者とは全く肌合いが異なる作家である。本論文が考察対象とするブリュースフの主要な散文作品『炎の天使』(1907-08) では、神と悪魔の狭間に揺れる蒙昧な中世ドイツが物語の舞台にされているが、作者の主眼は宗教的な争論にではなく、もっと別のところにある。

本稿は、『炎の天使』を執筆および改作していた1905頃～08年の時期のブリュースフがおかれていた歴史的ならびに個人的な状況を鑑みながら、作者が造形した小説の独特な構造をとおして、この作品の意味を考究することを目的としている。¹

¹ 日本国内の『炎の天使』に関する先鞭的な研究として、以下の論文が挙げられる。鈴木喜久男 (後の鈴木晶) 「ブリュースフ『炎の天使』」東京大学文学部露文研究室年報『Rusistika』第2号, 1982

2. Вяч.イヴァーノフ、メレシコフスキイとブリューソフ

西欧の巨大な知的建造物に対峙することができる幅広い教養を身につけていた Вяч.イヴァーノフ、メレシコフスキイ、ブリューソフだが、個々の関心はそれぞれ異なる方向にむけられていた。彼らの関心の所在の相違について、少し詳しく考察してみよう。

まずは、イヴァーノフ。彼の宗教的な創作活動は、1903年にパリのロシア社会科学高等学校（Высшая Школа Общественных Наук）で行った連続講演をまとめた「古代ギリシアの苦悩する神の宗教」（Эллинская религия страдающего бога; 1904-05）から始まる。ヴェストブルークの解説によると、² イヴァーノフは、アポロンに対比されるディオニュソスこそがギリシア悲劇の本質であると喝破したニーチェと、苦悩する神という属性はキリストの生誕劇と受難劇から後代の人々が付与したものにすぎないと主張したヴィラモーヴィッツの双方と対決した。イヴァーノフは、ニーチェの立場を支持し、苦悩する神の観念がギリシア悲劇に内在するのは確実であるが、まさにその悲劇性からディオニュソスはキリストの原型になったと述べ、ニーチェとも距離をおく。また、イヴァーノフは、最初期のキリスト教著作家たちが、ディオニュソス祭のオルギアは異端的な風習にすぎず、キリスト教とは縁もゆかりもないばかりか、ギリシア精神とローマ精神の間には明らかな懸隔があるとみなした、とも評している。³ イヴァーノフの生涯の課題は、古代ギリシア最初期のディオニュソス祭儀／ローマ・カトリック／ロシア正教という三者の理論的な融合をはかることにあった。ロシア正教の問題は、後に顕在化してくる。1921年、バクー大学で認証された博士論文『ディオニュソスとその原型的な祭儀』（Дионис и прадионисийство; 1923）では、悲劇という芸術上の一形式は、ディオニュソス崇拜と密接な結びつきがある、と彼は結論づけた。

1924年、イヴァーノフは、ボリシェヴィキの迫害を逃れるため、イタリアに向けて亡命し、1926年にローマへ移住するとすぐ、カトリック教会の洗礼を受けた。しかし、息子のドミートリイの発言によると、これは改宗ではなく、イヴァーノフはその後も正教徒であり続けたという。イヴァーノフは、Вл.ソロヴィヨフとの邂逅以前に、もう長い間、ロシア正教とローマ・カトリックの合同の問題に頭を砕いていた。⁴ 1926～34年、イタ

年、75-81頁。なお、『炎の天使』は20世紀文学における重要な作品であるにもかかわらず、これまで日本語訳が存在しない。

² Вестбрук Ф. Вяч. Иванов о возникновении греческой трагедии и филологической дискуссии начала XX века // Вячеслав Иванов: Исследования и материалы. Пб., 2010. С. 345-353.

³ Иванов Вяч. Эллинская религия страдающего бога // Новый путь. СПб., 1904. № 1. С. 112.

⁴ Обер Р., Гфеллер У. Беседы с Дмитрием Вячеславовичем Ивановым. Пб., 1999. С. 72-73. イヴァーノフの息子ドミートリイというのがいわくつきで、1907年に2番目の妻 Лидия Зиновьева-Аннибал

リアのパヴィア (Pavia) 大学などでロシア文学を講義し、1936～43年、教皇庁所属東方大学 (Папский восточный институт) で教会スラヴ語とロシア文学の教鞭をとり、Папская коллегия «Руссикум»⁵ でも働いた。この関係で、彼は聖事経 (Требник) のイタリア語翻訳と、将来のロシア語翻訳を見据えた (旧約の) 詩篇・黙示録・使徒行伝へのイタリア語注釈を委託された。⁶ 晩年期、イヴァーノフはローマ・カトリックとロシア正教の融和に尽力したが、ディオニュソス崇拝とキリスト教を同一視する彼の主張には、カトリック世界の誰もが承服しかねただろう。

次に、メレシコフスキイについて。メレシコフスキイの世界観は完全に二元論に立脚しており、それらを総合する第三の原理を探し求めた。二元論というのは、例えば、霊／肉、キリスト教／異教、旧約／新約 (両者を総合するものとしての Третий Завет)、禁欲主義／肉欲など。この単純な図式的思考法は、ドストエフスキイと共通する。彼はこう述べる。「カトリックの教条主義は、あまりにも長きに涉って、あらゆる死滅した中世の原理の徴表だった。神的なイデアリズムの歴史的形態は、あまりにも長きに涉って、人間精神を奴隷化し虐げてきた。[...] すべての善きロシア人の心の内には民衆への愛、社会的公正が潜んでおり、いまやソロヴィヨフにおいて、美と詩の光輪を背景に、永遠の神的な理想、聖物、靈感としてそれらが復活したのである」。⁷ しかし、ドストエフスキイと異なり、メレシコフスキイはこうした二元論を、代表作『キリストと反キリスト』三部作のなかで、西欧とロシアを舞台に、三つの異なる時代を背景として繰り広げた。第1部『神々の死、背教者ユリアヌス』(1895) では、ローマ帝国でのキリスト教公認後、押し寄せるキリスト教の大波に対抗して、太陽神という異教を広めようとする、新プラトン主義の影響下にあった4世紀のユリアヌス帝が描かれている。第2部『復活した神々、レオナド・ダ・ヴィンチ』(1901) の核心は、中世の蒙昧主義と新興の人文主義に揺れる15～16世紀のイタリアで、フランス軍の侵攻にさらされながら、ダ・ヴィンチが眼にす

が急死した後、彼女の初婚のときにできた娘 Вера Шварсалон (1890-1920) とイヴァーノフは性的交渉をもつようになり、1912年にドミートリイ (1912-2003) が誕生した。ヴェーラの一方向的な恋のためか、こうした不道德な関係への世間の非難を避けるためか、彼女は銀の時代の作家、作曲家 Михаил Кузмин (1872-1936) と結婚していた (後者がホモセクシュアルであることを知っての偽装結婚だったという説もある)。いずれにしろ、子供が誕生した後、二人は正式に結婚した。

⁵ 正式なラテン語名は、Pontificium Collegium Russicum で、1929年に設立された教皇庁直属の教育機関。Pontificium Collegium とは、カトリック司祭を国外に派遣するにあたり、宣教のための予備的な知識を授けるローマ在の組織のことである。新旧教徒対立に揺れていたドイツのため、1552年に Pontificium Collegium Germanicum が設立された前例がある。誠に奇妙なことではあるが、1920年代、教皇庁はソ連におけるカトリック布教を計画していた。

⁶ Обер Р., Гфеллер У. Беседы с Дммитрием Вячеславовичем Ивановым. С. 93.

⁷ Мережковский Д. О причинах упадка и о новых течениях современной русской литературы // Л. Тостой и Достоевский. Вечные спутники. М., 1995. С. 559.

るキリストと反キリストとの闘争にある。第3部『反キリスト、ピョートルとアレクセイ』（1904-05）は、ピョートル大帝の近代化政策と、それを反キリストの所業と嫌忌する民衆との対立をテーマにしている。物語の主人公は分離派の村落の焼き打ちを目撃した後、森へ逃れ、そこで孤独に暮らす一人の修道僧と出会う。彼こそが真のキリストの護持者ではないかという主人公の感慨をもって、三部作は終結する。

最後に、ブリュースフについて。ブリュースフには、イヴァーノフやメシコフスキイのようなアクチュアルな宗教的な関心が完全に欠落していた。しかし、近代西欧の新しい文学傾向には鋭敏に反応した。そのことは、自らヴェルレーヌ、ダンヌンツィオ（D'Annunzio；イタリアの作家）、ポー、ワイルド等の作品をロシア語に翻訳紹介した事実からも明らかだ。ブリュースフはロシア的土壌に根ざした文学主題を嫌悪した。彼はロシア人である前に、みずからをヨーロッパ人であると見なしていたようだ。また、ラテン語にも堪能で、『炎の天使』の注釈からもわかる通り、中世のラテン語文献を自在に読みこなせたものと推定できる。宗教的問題性に拘泥せず、文学の革新性のみを鋭意専心した分、彼は抹香臭さのない、純然たる、一級の storyteller だった。ブリュースフの文学は、ポーやナボコフの文学と非常に似通っているという印象を受ける。

3. 『炎の天使』のモダニズム性

ブリュースフの小説『炎の天使』（1908）の主要な時代と舞台は、1534年8月～1535年秋のドイツに置かれている。⁸ 1530年代のドイツでは、一方で、中世において猖獗^{しょうけつ}をふるった悪魔崇拜や魔女狩りの俗信が生き長らえ、他方で、宗教改革のうねりが北ドイツを巻き込み、西欧ラテン文化圏の一員として人文主義が浸透してきていた。イタリアにおいては、14世紀にダンテ（1265-1321）やペトラルカ（1304-1374）といった文学者が現れ、美術・建築史上では、15～16世紀にレオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）、ミケランジェロ（1475-1564）、ラファエロ（1483-1520）が活躍した。つまり、16世紀前半のドイツは、暗黒の中世からルネサンスと宗教改革を旗印とした近代への転換期にあったといえる。

しかし、この作品を歴史小説として読んではいならない。作者は、そうした時代状況を鑑みながら、独自のフィクションを紡ぎ出そうとしているからだ。この小説は、まずは

⁸ 1909年版『炎の天使』の刊行者による序文では、「物語の核心的な出来事は、（新暦：柿沼）1534年8月から1535年秋までに生じた（Самое действие «Повести» обнимает время с августа 1534 по осень 1535 года）」と述べられている。物語の核心的な出来事とは、主人公ループレヒトとレナータの出会いから後者の刑死までを指す。物語は、第16章の記述から、手記の筆者（ループレヒト）によって、1536年春、ヨーロッパから新大陸に向かう船の出航を待つ間に書かれたと推定される。刊行者による序文は新暦、手記は旧暦に依拠している（フィクション内の時空間についての議論）。

ってモダニズム小説として理解されねばならない、というのが筆者の持論だ。『炎の天使』のモダニズム性は、①メタテキスト性 (metatextuality)、②間テキスト性 (intertextuality) に帰着すると思う。これら 2 つの用語はしばしば混同されて使用されるので (古典ギリシア語の前置詞・接頭辞 *μετα* の多義性が原因だろう)、初めにこの論文内で含意されている両語の概念を明確化しておきたい。「メタテキスト性」という場合のメタは *after* の意味であり、一つの先行テキストが存在し、それに言及する後続のテキストが出現することを指す。他方、「間テキスト性」とは、テキストの内部で他のテキストを直接引用するか、暗に示す (文学批評用語の *reminiscence* と同義) ことをいう。

まず、メタテキスト性の問題に触れる。『炎の天使』の基本部は、16 章から成るループレヒト (Ruprecht)⁹ の手記 (先行テキスト) から構成されている。小説全体は、この手記を後代の注釈者がロシア語に翻訳して、序文と注釈 (後続テキスト) を添えて、出版したという結構になっている。先行テキスト／後続テキスト (手記の作者)／注釈者の関係性は、版によって異なるが (次節参照)、原作者のテキストに関する注釈者のテキストという二重構造に基づいている。この構成は、ナボコフの『青白い炎』に近似している。『青白い炎』は、原作者シェイドの詩を、彼の死後、友人キンボートが序文と詳細な注釈を付して刊行したという体裁になっている。さらに、『青白い炎』と事情が同じであるが、一次テキストは原作者が執筆した直接的なものではなく、後で誰か (ナボコフ作品の場合、キンボート) が手を加えた可能性があることが示唆される。この先行テキストの厳密性を曖昧化するという手法も、極めてモダニズム的だといえる。

次に、間テキスト性の問題である。手記のなかで、ループレヒトは当時の多くの著作者や書物に言及している。主人公がもちえた知識は、1504～36 年までの時期に限局されるが、後代の研究者による注釈には、それより後の学問的知見の進展が反映されている。例えば、コペルニクスが地動説を唱えた 1543 年刊の『天球の回転について』 (羅 *De revolutionibus orbium coelestium*) は、注釈にしか現れない。¹⁰ つまり、作内人物でもあるループレヒトは、天動説の世界観のもとで生涯を終えたと想像できる。こうした面で、ブリューソフは手記の作者と注釈者の視点の範囲を峻別している。手記の一人称体語り手と注釈者が知りうる中世～近代の様々なテキストが織り交ぜられながら、物語は、いわば時代交錯的に、編み合わされている。ここにブリューソフの斬新性がある。

⁹ ドイツが舞台なので、登場人物名や地名等の表記は、ドイツ語訳 (Walerij Brjussow, *Der feurige Engel*, übersetzt von Rheinhold von Walter (1910; repr. Köln: DuMont Buchverlag, 1990)) に準拠する。ただし、よくわからないものの、Ренатаは *Renate* (レナーテ) とドイツ語に翻字すべきだと思うのだが (誤訳か?), ドイツ語訳では *Renata* となっているので、この論文でも「レナータ」の表記で統一する。

¹⁰ *Брюсов В. Собр. соч. в 7 томах. Т. 4. М., 1974. С. 303.*

4. 『炎の天使』の版の問題

『炎の天使』の初出は、文芸誌『天秤座』（«Бесы»）の1907年刊1-3, 4-12号, 1908年刊2-3, 5-8号である。1908年, 小説は初出そのままの形で, ブリュースフが創設者の一人を務める「スコープオン」社から2巻本の形で公刊された。続く1909年, 同じ「スコープオン」社から, 「注釈つきの改訂版（исправленное и дополненное примечаниями <издание>）」とタイトルに銘うって, 1巻本として出版される。この1909年版が『ブリュースフ7巻本選集』の第4巻に収録された。¹¹ 選集の後に出たすべての版（外国語翻訳も含め）は, 1909年版を基にしている。

初版（1908年版）と後続版（1909年版）の主な違いは, ①手記の後にくる注釈が新たに書き改められたこと, ②刊行者による序文の文言が全面的に変更されたこと, の2点に存する。ここで重要になるのが, 書き直された序文の内容である。

1908年版の「ロシアの出版者の序文」（предисловие русского издателя）では, テクストの入手経緯とテキスト・クリティークの詳細が解説されている。¹² それによると, 羊皮紙の装丁を施された文書は, 今日まで唯一残存する草稿であり, 今はある個人の所蔵に帰している由。今回, 所有者の好意により, ドイツ語出版に先立ち, ロシア語に翻訳することとなった。文書は, 15世紀末～16世紀初頭にドイツで印刷された書物と同じく, 標準ドイツ語（Hochsprache のことだろう）で書かれているが, 方言的特徴がなきにしもあらずである。¹³ 手記の前にある献辞だけは, ラテン語で綴られている。だが, 文書は, 決して1536年春にこの懺悔録を執筆したと称する作者の自筆原稿ではない。おそらく16世紀の最終末にカトリック修道士か誰かによって写字されたものだろう。そのことは, 近代的な言語傾向と, 飾らない率直な告白の調子が題名の凝った装飾文字に相応しくないことから判明する。しかし, 文章が作者自身の手で書かれたことは疑いを入れない。16～17世紀のルネサンスと宗教改革の時代, 魔術や占星術は, 整然たる一学問分野に進化を遂げた（アグリッパの著『魔術の概念について』を参照せよ）。ジャン・ボダン（Jean Bodin ; 仏の政治学者）やアンブロアーズ・パレ（Ambroise Paré ; 仏の宮廷外科医）やコペルニクスのような一流の人文学者も, 魔女や悪魔憑きという事象を信じていた。『魔女の槌』（Malleus maleficarum）には, 「魔女の^{ぎょうせき}行跡を信じないことは最たる異端である」という章すらある。この時代, 手記にも挙がっているヨハン・ヴァイアー（Johann Weier ; オランダの医者）が初めて, 魔女は特別な病気に罹った者であるという仮説を提示した。手記の翻訳は, 原

¹¹ Чудецкая Е. «Огненный ангел»: История создания и печати // Соб. соч. Брюсова. Т. 4. С. 341-349.

¹² Брюсов В. Соб. соч. Т. 4. С. 341-342.

¹³ グーテンベルクの活版印刷術によってラテン語の旧約・新約聖書が印刷されたのが1455年。

本にある微細な文体的習癖を再現していない自由翻訳と言わねばならない。文書の後に、訳者による必要な注記を加えた。以上が、1908年版序文の要約だ。

ちなみに、中世に魔女の狂乱とされていた現象が、ヒステリーのような精神疾患の症状であり、治療の対象となりうるという視座は、18世紀末に生じた。特に、仏人フィリップ・ピネルと英人ウィリアム・テュークの功績が大きい。¹⁴ 17世紀以降、西欧では、狂人という烙印を押された者は、社会的不適合格者として施設に監禁され、一般社会から隔離された。フロイトとブロイアーの共著『ヒステリー研究』が出版されたのが、1895年のことである。19世紀後半に入ってようやく、フロイトがこうした精神神経症を科学的に分析し、類型化する学問分野である精神分析学を樹立することができた。16世紀に生きたヴァイアーは、こうした大きな歴史的な潮流の先駆者だったといえる。¹⁵ しかし、20世紀初頭のロシアで、そのことに言及しているブリューソフの慧眼は、括目に値する。

さて、1909年版の「ロシア語版に寄せての序文」(предисловие к русскому изданию)の最後には、Валерий Брюсов という自署があり、出版者の存在や、テキストの入手経緯や、テキストが自筆原稿でないという考証がすべて削除されている(ただし、序文後半は同じ)。つまり、本文も序文も注釈もすべて、ブリューソフの手になるフィクションだと宣言されたのだ。一次テキストを謎化させる初版の序文の方が、近代小説としてのモダニズム性が高かっただろう。だが、1909年版の序文は、手記の作者が歩んだ複雑な人生行路(手記だと必ずしも明記されていない)を説明しており、物語の因果関係を理解するうえで役に立つ。おそらく読者の便宜を図って序文を差し替えたのだと考えられる。

5. テーマ的(thematic)な観点からみた『炎の天使』のジャンル

『炎の天使』は、悪魔(デーモン)に憑かれたかのような女性を主人公にしている。悪魔崇拝と魔女のテーマは、美術史上、悪魔集会(サバト)の狂宴やワルプルギスの夜へ飛行する魔女を描いた銅版画や木版画などで、16~17世紀のドイツにおいて既に様式として確立されていた(例えば、16世紀のアドレアヌス・フベルトゥスの銅版画「ブロッケン山に行く準備をする魔女」や1650年頃のサバトを描いたミヒャエル・ヘルの銅版画)。後世、スペイン人画家ゴヤ(1746-1828;特に有名なのが「黒い絵」14点の一つ「魔女の夜宴」)などがこのテーマを継承した。

¹⁴ 精神神経症が治療対象となっていく経緯に関しては、以下を参照。ミシェル・フーコー(田村淑訳)『狂気の歴史—古典主義時代における—』新潮社、1975年、第3部第4章。

¹⁵ ヴァイアーに関しては、以下を参照。菊地英里香「J・ヴァイアー『悪魔の眩惑』: 魔女は罪人か、病人か?」『古典古代学』(筑波大学大学院人文社会科学研究所古典古代学研究室)第1号、2009年、29-51頁。

こうした中世のおどろおどろしい雰囲気は、西欧文学にも影響を与えた。その筆頭は、言うまでもなくゲーテの『ファウスト』(1808-1832)である。ドイツ文学特有の悪魔との契約というテーマに限ると、シャミッソーの『ペーター・シュレミールの不思議な物語』(1814;『影をなくした男』として文庫化)やトーマス・マンの『ファウストゥス博士』(1947)等が挙げられる。サバトを描いた作品としては、ユイスマンスの『彼方(Là-bas)』(1891)と、ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』(1966-1967)が知られている。ブルガーコフはサバトの場面を描くにあたって、ブリュースフの『炎の天使』を参照したに違いない。なぜなら、ロシア文化にとって西欧中世の悪魔崇拜などという事象は疎遠で、ロシアの昔話に出てくる悪魔(чёрт)は、トルストイの「イワンの馬鹿」からもわかる通り、どこかおっちょこちよいで^{ひょうきん}劇的な形象だからである。他に、(後述するが)17世紀前半、フランスの小村ルーダンの女子修道院で、センセーショナルな悪魔憑き事件が起き、それを題材とした小説が、ポーランド人作家ヤロスワフ・イヴァシュキエヴィチの『天使たちの教母ヨアンナ(Matka Joanna od Aniołów)』(1943;1961年にイエジー・カヴァレロヴィチ監督により『尼僧ヨアンナ』として映画化)やハクスリーの『ルーダンの悪魔(The Devils of Loudun)』(1952)である。悪魔小説ではないものの、中世の不気味な雰囲気、不可思議な恐怖感をたたえた、ゴシック・ロマンスと称される諸短編(「楕円形の肖像」(1839)、「ベレニス」(1835)、「モレラ」(1835)、「ライアジーア」(1838)、「アッシャー家の崩壊」(1839))を、ポーが著した。¹⁶ 無知蒙昧なロシアの農村のカルト集団を描いたベールイの『銀の鳩』(1909)も、以上の小説のリストに付け加えることができるかもしれない。

6. これまでの『炎の天使』解釈

『炎の天使』は、従来、ロシア(ソ連)で本質的に理解されてこなかった。というのも、西欧には15~17世紀の悪魔主義や魔女狩りの生々しい記憶が歴史に揺曳しているが、少なくとも東スラヴ圏ではそうした事態はなかったからだ。そのため、この小説の読まれ方は、ニーナ・ペトロフスカヤをめぐるブリュースフとベールイの三角関係に関する伝記的な解釈に収斂されてしまった。彼女は、本物のファム・ファタール(仏 *femme fatale*)だと思われるが、こうした伝記的理解では『炎の天使』の本当の面白みが味わえない。しかし、小説を読むうえで、登場人物のモデルの実人生を知っておくことも有益であろう。この観点から、以下、ドイツ人研究者L.ケルンが著したペトロフスカヤ伝に基づいて、実際

¹⁶ ポーのゴシック・ロマンスに関しては、以下を参照。大貫友歌「ポーの探偵小説を読む—その文化的背景と語りの技法—」『言語と文化論集』(神奈川大学大学院外国語学研究科)第17号,2011年,8-13頁。

の人間関係を整理しておく。¹⁷

ニーナ・ペトロフスカヤ (Нина Ивановна Петровская; 1879-1928) は小官吏の娘で、1896年、モスクワ大学法学部の学生だったセルゲイ・ソコロフ (Сергей Алексеевич Соколов; 1878-1936) と結婚した。実家が富裕なセルゲイとは、階級的に不釣り合いな婚姻だった。セルゲイは大学卒業後、弁護士として働き出すが、同時に象徴派詩にも共感を寄せ、みずからも詩作に従事していた。その頃、モスクワにはシンボリストたちが自らの著作を公表できる場が、出版社「スコーピオン」(Скорпион; サソリ) 一つしかなかった。名目上の出版者兼編集者は、活動資金を提供している資産家のセルゲイ・ポリャコフ (Сергей Поляков) であったが、実質的には、「スコーピオン」社が刊行する書籍、月刊誌「天秤座」(Весы) に掲載する論稿の選定は、ブリューソフ一人が担っており、まさにブリューソフの専制国家の観を呈していた。この間隙について、1903年、セルゲイ・ソコロフは、シンボリストたちのための第2の出版社「グリフィン」(Гриф; 胴はライオンで、頭と翼がワシの架空の動物) をモスクワで設立する。当然、「グリフィン」は「スコーピオン」とライバル関係に入る。「グリフィン」は、初めはブリューソフのお眼鏡にかなわなかった「スコーピオン」の落選投稿者の作品を載せていたが、内部から「スコーピオン」の二番煎じではないかという批判が巻き起こった。そうした時期、ソコロフ夫妻が定期的に関っていた文学の夕べに、17歳のギムナジウム生ヴラジスラフ・ホダセーヴィチが訪れた。ニーナ・ペトロフスカヤは、すぐさまこの初々しい青年のことが気に入った。1907年に「グリフィン」から発刊されたホダセーヴィチの処女詩集『青春』(Молодость) 中の詩「聖なる愛」「手紙」は、いずれも彼女に捧げられたものである。

内部批判を受けて、セルゲイ・ソコロフは「グリフィン」に前期ロシア象徴主義者の大御所バリモントを招くことを決める。このことが、セルゲイとニーナの夫婦関係に決定的な破綻をもたらす。バリモントはニーナに言い寄り、二人は不倫関係に陥る。だが、結局、バリモントは彼女を捨て去る。傷心のニーナを助けたのが、アンドレイ・ベールイである。ベールイは、彼女の口からバリモントとのいきさつを聞き、心から慰めの言葉を述べた。「神的秘術」(теургия) を著したこの時期、ベールイは芸術の現実化、生を神秘劇に変えることを唱道していた。ニーナはベールイを救世主のごとく受けとめた。両者の交際が始まったのは1903年の秋であると、ベールイの自伝で語られている。はたしてニーナ・ペトロフスカヤとは、どのような人物であったのだろうか？その風貌を、ベールイの自伝から再現してみよう。

¹⁷ Liliana Kern, *Der feurige Engel: Das Leben der Nina Petrowskaja* (Berlin: Berliner Taschenbuch Verlag, 2006). この本は研究書というよりも、伝記小説といった趣だが、当時のシンボリストたちの活動の様子を生き生きと描きだしている。

彼女(=ニーナ・ペトロフスカヤ)は善良で、思いやりのある、心から誠実な女性だった。しかし、あまりに感受性が鋭すぎて、狂乱状態に陥ることもあった。そうしたときには、見境がなくなり、普段の彼女とは思えない言葉を口走り、突発的な激情に身をまかせ、全くの別人に変わってしまうのだ。妙に塞ぎこんだり、偏執狂的な想念を繰り返したり、とにかく、彼女にしか分からない屈辱に反撃しようとして、自身を、あるいは他の誰かを射殺しかねない剣幕だった。すさまじいヒステリーの発作のとき、自分や周りの人たちに囚われた妄想について長々と話して聞かせた。いつもは嘘などつかない彼女だったが、興奮状態のときには、あらゆるヒステリー女と同じく、みずからと他人に悪態を吐きながら、心底、自身の妄想を信じた。¹⁸

初め、ベールイは憐憫の情からニーナに接し、彼女もその気遣いに感謝していたが、双方の仲が深まるにつれ、肉体関係へと発展してしまう。情欲、互いの悔悛の告白、罵り合い、また情欲……。ニーナはこうした泥沼状態に耐えかねて、あろうことか、ブリューソフに内密の痴話を打ち明ける。この頃、ブリューソフは悪魔学(demonology)にのめり込んでおり、シンボリストたちの錯綜した人間関係に興味を示した。ニーナはブリューソフへの相談を重ねているうちに、いつしか彼の情婦となってしまう。この後、ブリューソフは、ニーナの崇敬的となっているベールイに嫉妬心を覚えた。ここで『炎の天使』の構想が確立された。Вл.ソロヴィヨフのソフィア像に心酔するベールイは、その理想が天使マディエル(Madiel=Мадизель)に、人間としてのベールイがハインリッヒ伯爵(Heinrich=Генрих)に分離し、ブリューソフはハインリッヒを妬むループレヒトに姿を変えた。二人の決闘の舞台は、人文主義と悪魔崇拜が行き交う16世紀前半に設定された。

ニーナ・ペトロフスカヤは、1907年4月27日、モスクワの科学技術博物館(Политехнический музей)で、ベールイの講演後、発砲未遂事件をしでかした。射撃は不発で、彼女はすぐに取り押さえられ、手から拳銃が奪い取られた。一説によると、彼女はベールイを狙ったとされるが、他説によると、最初、ベールイを撃とうとしたものの、途中で思い直して、銃口をブリューソフに向けたことになっている。モチュリスキイはこれら2説に対してどちらが真相か分からないとしているが、¹⁹ベールイの自伝と、ドイツ人研究者ケルンにより引用されているリンジナ(Л. Рындина)の証言を照合すると、ニーナが最後にブリューソフを撃とうとした説の方が信憑性を帯びる。

この事件の前か後かは不明だが、1907年、ニーナはセルゲイ・ソコロフとの婚姻関

¹⁸ Бельй А. Начало века. М., 1990. С. 306-307.

¹⁹ Мочульский К. Андрей Белый. Париж, 1955. С. 57. この著作では、銃撃事件が1905年春に起こったと誤記されている。

係を解消し、ブリューソフに捨てられた後、1911年に極貧のうちにロシアを去り、1928年2月23日、パリのプログレ・ホテル (Hôtel du Progrès) でガス自殺を遂げた。

7. 『炎の天使』執筆時のブリューソフの3つの関心

前節で述べたニーナ・ペトロフスカヤをめぐるベールイとブリューソフの三角関係は小説の登場人物同士の関係を規定したであろうが、ブリューソフの関心の根はこうした現実生活上の表面的な現象よりもっと深いところにある。具体的には、彼の興味は次の3つの方向に涉って展開した。①アグリッパ・フォン・ネッテスハイム (Agrippa von Nettesheim)、②ファウスト伝説、③ルーダンの憑依事件である。以下、それぞれを考察してみよう。

アグリッパ・フォン・ネッテスハイム (1486-1535) は、主著『隠秘哲学について』三部作 (De occulta philosophia libri tres) によりオカルト学の創始者の一人とみなされることが多いが、ブリューソフは、彼を二つの対抗勢力に割れた15～16世紀のドイツの状況下に生きた百科全書派的な教養人として高く評価していた。二つの勢力とは、「新思潮の喧伝者、エラスムス (1466-1536) とロイヒリン (Johannes Reuchlin; 1455-1522) の味方、『人文主義者』、そして、古い観念の擁護者、『無知蒙昧なやから』、『反啓蒙主義者』²⁰ のことである。すなわち、彼は、15～16世紀のドイツを新旧の時代精神が衝突しあう歴史の結節点の舞台と捉え、アグリッパをどちらの陣営にも属さず、^が 峨々としてそびえる孤高の碩学として把握していた。小説内でも登場人物として現れるアグリッパの形象のなかに、農奴問題や、帝国の後進性や、功利主義や、トルストイやドストエフスキイが抱えていた伝統的なロシア文学の主題 (メレシコフスキイが指摘したような) といった旧時代の遺産に理解を示す一方、西欧文学の新風を肌を感じながら、ロシアで新たな芸術を樹ち立てようと船出したブリューソフが、自分自身を同一化させているのだ。ベールイが天使マディエルとハインリッヒ伯爵に分離したように、ブリューソフはアグリッパとループレヒトに二分化した。そのため、小説の作者は、アグリッパが生まれ学んだケルンに、主人公ループレヒトを送り込んでいる。1508年、アグリッパはバスク人の友ヤノトゥスの城奪還の要請に応え、スペインに行き、傭兵を雇い入れるが、ループレヒトもまた傭兵としてスペインに滞在する。

第二に、ファウスト伝説について。ブリューソフは、19世紀のゲーテの韻文小説『ファウスト』に興味を示したというよりも、16世紀後半のドイツで流行したファウスト神話に傾倒した。そのことは、1909年版『炎の天使』の序文において、『ファウスト博士の

²⁰ Брюсов В. Оклеветанный ученый // Огненный ангел. М., 1993. С. 355. ブリューソフ7巻本選集とは別版 (ただし、小説本文は同じ) の『炎の天使』に付録として掲載された論文。この論文の初出は、Орсье Ж. Агриппа Неттесгеймский: Знаменитый авантюрист XVI в. М., 1913. С. 9-15.

民衆本』を刊行したフランクフルトの印刷業者ヨハン・シュピース (Johann Spies) に言及されていることから分かる。『ファウスト博士の民衆本』(1587) はフランクフルトで一大ベストセラーになり、幾版も版を重ねた。ファウストと悪魔との契約の話はドイツ中で、さらには噂が飛び火してオランダ、イギリス、フランスにまで伝わった。²¹ ファウストは実在の歴史的人物であり、今のバーデン・ヴュルテンベルク州の小村クニットリンゲン (Knitlingen) ——ヘルマン・ヘッセの文学で馴染みの深いマウルブロン近郊——で生まれたとする説が有力だ。²² 実際のファウストは、ゲーテの小説にあるような、認識との格闘に疲れ果て、悪魔と契約して若さを再体験する老学者ではなく、死者をこの世に呼び出す交霊術、個人の未来を予言する占いを売り物にして、16世紀前半のドイツ各地を渡り歩く香具師かぐし的な人物であった。『炎の天使』においても、ファウスト博士とその従者メフィストフェレスは、作中に登場し、ホメロスの『イーリアス』に出てくる古代ギリシアの絶世の美女ヘレネーの霊を呼び出す、半信半疑な交霊術師として描き出されている。だが、レナータが牢獄の鉄鎖につながれて刑死する場面には、ゲーテ『ファウスト』のグレートヒェンの死に対する文学的追想 (literary reminiscences) があるであろう。

第三に、ルーダンの悪魔憑依事件について。事件と『炎の天使』の中心的な形象レナータに関しては、ドイツ語訳の解説で、以下のように指摘されている。「レナータの苦悩と異端審問官による悪魔祓いは、多くの細部からして、歴史的資料である(ジャンヌの)日記から、(ブリューソフが) 霊感を受けたものである。修道女ジャンヌと同じように、レナータもまた、性的な欲望をもった悪魔と純粋潔白な天使との対峙を経験する。天使は、守護者としての役目から、節制生活と体に刻まれたキリストの受難の聖痕を思い起こすよう(レナータに) 促した」。²³ 1632年9月から、フランスの小都市ルーダン (Loudun) のウルスラ会女子修道院 (Couvent d'Ursulines) にて悪魔憑きの騒動が持ちあがった。²⁴ 初め、悪魔は修道女ジャンヌ・デ・ザンジュ (Jeanne des Anges) に取りつき、次々に他の修道女を襲った。このことは、ボルドー司教座、それからフランス国王に報告され、正式の悪魔祓いが申し渡される。国家的な究明調査の結果、騒動は司祭ユルバン・グランディエ (Urbain Grandier) の罪業に帰せられ、1634年8月、彼は処刑される。これで事件は一応の幕引きをみた。この出来事は、ジャンヌの回想録だけではなく、多数の17世紀フランスの公文書にも記録されている。レナータがループレヒトのもとを立ち去った後、女子修

²¹ ハンスヨルク・マウス (金森誠也訳) 『悪魔の友ファウスト博士の真実』中央公論社、1987年、24-25頁。

²² 溝井裕一『ファウスト伝説：悪魔と魔法の西洋文化史』文理閣、2009年、4頁。

²³ Brjussow, *Der feurige Engel*, p. 439.

²⁴ ルーダンにおける悪魔憑依事件に関しては、以下を参照。ミシェル・ド・セルトー (矢橋通訳) 『ルーダンの憑依』みすず書房、2008年。

道院に忍び隠れ、そこで悪魔憑き騒ぎが持ち上がるという筋立ては、明らかに修道女ジャンヌの悪魔憑依事件を下敷きにしたものだ。

8. レナータと出会うまでのループレヒトの人生行路

ここまで、縷々^{るる}と『炎の天使』に対するブリュースフの構想について述べてきたが、以降、『炎の天使』の物語そのものを仔細に検討していきたい。小説は、16世紀という物語の時代を意識してなのか、16章から構成されている。以下、筆者は、章ごとにではなく、内容的な切れ目に即して、物語の流れを追跡していきたい。

1909年版の小説は、出版者（またはロシア語訳者）の序文→逆ピラミッド（▽）の図形でデザインされた手記の題名→ラテン語の献辞→「親愛なる読者へ（AMICO LECTORI）」と題された手記の著者による序文→手記の第1章という順序で、物語世界へ導いていく。このなかで、逆ピラミッドで記述された、関係詞節が長々と続く題名が、手記の一人称体の語り手（「わたし」＝作中人物のループレヒト）の身边で起きた出来事に対する心的な態度を表明している。この箇所は、物語を理解するうえで非常に重要なので、以下、全文を訳す。

炎の天使、真実の物語。—この物語では、幾度も光り輝く天使の姿をとって、ある少女の前に姿を現し、彼女をさまざまな罪悪へと至らしめた悪魔（Дьявол）について語られている。さらに、主なる神の教えに反する魔術、占星術、カバラ学、交霊術の従事について、トリーア大司教が臨席したこの少女に対する審問について、それから、騎士との、3回に渉るアグリッパ・フォン・ネッテスハイム博士とファウスト博士との出会いと会話について語られている。物語は、すべての目撃者であるわたしが書き記した。²⁵

この物語を書き終えた手記の著者ループレヒトは、8歳のレナータの前に現れたマディエルを天使ではなく、悪魔と認識していたことが、注目に値する。しかし、キリスト教徒的な清廉潔白な生活を送るようレナータに説いたマディエルは、本当に悪魔だったのか？小説読了後も、真実は霧の中にある。半面、読書後の読み手を狐につままれた状態にする

²⁵ Брюсов В. Соб. соч. Т. 4. С. 11. 「カバラ学」と訳した単語はロシア語だと гоетейя となっており、どの露露辞典にも立項されていない。この語は、独訳と英訳（おそらく1910年の独訳を参照して、1930年に刊行された本）では、それぞれ die Kabbalistik, the Cabalistical Sciences と変換されている。ロシア語のネットで検索すると、гоетейя という言葉は、天使から伝えられたとされるエノク語（英 Enochian, 独 Henochisch, 露 енохианский язык）に遡るらしい。これ以上の事柄については、この方面の好事家の興味に任せたい。

ことこそが、モダニズム小説の醍醐味なのかもしれない。

注釈者と手記著者による二つの序文から明らかとなるループレヒトの経歴を検討する。わたし（ループレヒト）は、1504年末、「聖アガタの日」の2月5日、トリーア（Trier）大司教座の管轄下にあるロースハイム（Losheim；現在のザールラント州）に生まれた。「1504年末」は、刊行者の序文で「1505年初め」と修正されている。実は、ユリウス・カエサルが樹立したユリウス暦（旧暦）は3月1日を1年の開始日としており、1月1日を起点とするグレゴリオ暦（新暦）とは日数の計算の仕方が異なる。²⁶ それゆえ、新暦1505年2月15日（旧暦2月5日）を「1504年末」とする手記の表記は正しい。また、注釈者は1582年以降のグレゴリオ暦時代に生きていたことが特定される。こうした細部に、ブリューツフのラテン的銜学趣味が面目躍如としている。14歳になったわたしは、父親から大学での学業継続を申し渡され、ケルンにいる父の旧友のもとに送り出された。当時のケルンは、人文主義者ヨハネス・ロイヒリンを慕う一派と、カトリック蒙昧主義の元凶であるドミニコ会との闘争の場になっており、とても学問どころではなかった。わたしはケルン大学で行われていた講義を聴講したものの、日々、酒と女とトランプ賭博と決闘沙汰に明け暮れ、監獄送り手前まで至るが、なんとか生まれ故郷へ帰還することができた。3年間のケルン時代、わたしは人文主義者の著作を初めとする様々な書籍を乱読した。

1522年、ロースハイムに戻ると、17歳のわたしは、町で偏屈者として敬遠されていた薬屋の息子フリードリヒと親交するようになる。愛書狂のフリードリヒと夜毎に読書会を開き、ドイツの辺境で入手しうる限りのラテン語とドイツ語の本を読み込んだ。こうして、二人は「薬屋の屋根裏部屋（чердак）をアカデミーに変えた」。²⁷ ブリューツフは、文学的追想によりドストエフスキ『罪と罰』のラスコーリニコフの屋根裏部屋に読者を送り込むとともに、アレクサンドル3世（在位1881-1894年）の反動政治時代、ナロードニキの生き残りが民衆への啓蒙活動にたずさわっていたことへの暗喩を表現している。ゴークイが、19世紀末のカザンで、元ナロードニクの書店経営者が開催する地下サークルで、いかに新思想を吸収したかは、彼の自伝『人々の中で』（1916）を読めば分かる。

1526年の初め、わたしは徒歩傭兵（ландскнехт < Landsknecht）になることを決意する。そして、1526年6月5日にこっそりと生家を後にして、ゲオルク・フォン・フルンツベ

²⁶ 紀元前45年に制定されたユリウス暦は、地球が太陽を一周する時間が365日より約4分の1だけ長いという認識の下、4年に一度、2月を28日から29日とする「うるう年」（一年が366日）を設けた。しかし、実際の地球の公転時間は365.2422日であり、ユリウス暦よりも11分、長い。この細かな誤差を考慮し、1582年、教皇グレゴリウス13世が刷新した暦法（グレゴリオ暦）は、ユリウス暦に10日を加算した。19世紀になると、11分の時間差はさらに積もりあがり、旧暦を新暦に直すにはプラス12日を要した。詳しくは、以下を参照。福島登志夫「暦と時間—精度への挑戦」別冊 Newton 『時間とは何か：心理学的な時間から相対性理論まで』、2013年、60-67頁。

²⁷ Брюсов В. Собр. соч. Т. 4. С. 19.

ルク (Georg von Frundsberg; 1473-1528) が率いる軍隊に加わる。1527年5月6日、ドイツ人とスペイン人の混成部隊によるローマ占領に参戦した。この後、約一年間、イタリアの各都市を転々としたが、翌1528年の春、スペイン軍の司令官に呼び出され、一緒にスペインのトレドに行き、エルナン・コルテス (Фердинанд Кортец < Hernán Cortés de Monroy y Pizarro; 1485-1547) と会見することになる。²⁸ コルテスの大航海の話に発奮されたのか、わたしは新世界に赴く決意を固める。その頃、新世界では、サント・ドミンゴ (現在のドミニカ共和国の首都) でのヴェルザーの銅山開発を皮切りに、フッガー、エリンガー、クロムベルガー、テツェルといったドイツ人富豪が利権獲得のため進出していた。わたしは、そうしたドイツ人商會に頼まれ、新たな鉱石の鉱脈、アメジストとエメラルドの生産地、希少木材の生育地を求め、チコラ (Chicora; 現在のアメリカのサウスカロライナ州在と考えられる、16世紀のスペイン人開拓者たちが信じた、伝説上の資源に恵まれたアメリカ原住民の土地) からトゥンベス (Tumbes; ペルーの都市) まで隈なく探索した。こうして、わたしはアメリカ大陸と西インド諸島で5年間を過ごし、少なからぬ金を貯め込んだので、1534年春、メキシコ湾のベラクルス港から、ヴェルザー商会所有の船でヨーロッパに向けて出航した。アントワープに着くと、新世界から受け継いだ雑事に追われ、ようやく1534年8月に故郷のロースハイムを目指してのライン下りに旅立った。

1909年版『炎の天使』の出版者の序文によると、手記の著者がみずからの体験の後すぐに文書を叙述した傍証として、彼がミュンスター叛乱²⁹の結末を知らなかったこと、ウルリッヒ・ツェージイ (独 Ulrich Zäsy, 羅 Ulrich Zasius; ドイツの人文主義的な法学者) を同時代の生者として扱っていることが挙げられている。ミュンスター叛乱は、(新暦) 1535年6月25日、再洗礼派の敗北ということで決着した。ツェージイは、(新暦) 1535年11月24日に没している。新暦 (グレゴリオ暦) を旧暦 (ユリウス暦) に直すには、10日を差し引けばよい。手記の執筆年代は、1536年春、欧州大陸から新世界へ出帆する予

²⁸ 1528年当時、イベリア半島はスペイン王国とポルトガル王国に分立していた。1469年、後のアラゴン国王となるフェルナンド2世が、カスティーリャ国の女王イサベル1世と婚姻したことで、1479年、スペイン王国が誕生した。1486年、クリストファー・コロンブスは、アメリカ大陸への航海の金銭的援助を両国王に申し出る。公式の許可が下り、彼は大西洋を横切り、1492年10月、西インド諸島の一つグアナハニ島に上陸し、それからキューバ島に達した。他方、コルテスは、1511年、キューバ征服に従軍し、1521年、アステカ帝国を滅ぼし、その後、カリフォルニア半島を探検してから、1527年、スペインに一時帰国している。このときに、ループレヒトはコルテスと会見したのであろう。ブリューソフの史実考証は完璧である。おそらく数多くの西欧語の歴史書を渉猟した結果、このフィクションの骨格を組み立てたに違いない。

²⁹ ドイツ中西部のミュンスター市 (現在のノルトライン・ヴェストファーレン州) で、1532～1535年、福音派の説教師ベルンハルト・ロートマン (Bernhard Rothmann) が、神聖ローマ帝国で固く禁じられていた成人の再洗礼を唱え (カトリックの慣習は幼児洗礼)、宗教改革運動を始めた。1535年、カトリックのミュンスター司教が都市に軍事介入し、再洗礼派は鎮圧された。

定の船の停泊中である。ループレヒトは、1535 年秋のレナータの死後、茫然自失の状態に陥り、約 3 ヶ月間、フランスで働いた後、アメリカに旅立ったので、1536 年の手記執筆年代、1535 年後半のドイツの事情を知りえなかったとしても、不思議ではない。

9. ループレヒトとレナータの邂逅（第 1 章）

わたしは馬を買い受け、それを駆ってノイス（Neuss）の地を目指した。道中、宿屋に宿泊した。夜半、隣の部屋から洩れでる囁き声とかすかなうめき声で、目を覚ます。わたしは何事かと思い、隣室の扉を開けた。そこには、壁にすがった女性（レナータ）が立っており、すぐさま「ループレヒトなの？ やっと来たのね」と呟いた。わたしは女が悪魔にとり憑かれているものと思ったものの、次のような彼女の長々しい告白話を聞く羽目になった。彼女が 8 歳くらいのとき、部屋に「全身が炎のようなものに包まれ、純白の衣をまとった」（*весь как бы огненный, в белоснежной одежде*）³⁰ 天使が舞い降りた。天使はマディエルと名のつた。この描写には、ブリュソフによるベールイ（「白」という意味）への暗示が隠見する。天使は、キリスト教徒としての厳しい勤行をレナータに課した。毎日、教会に参拝すること、寒い夜には裸になって屋外で祈ること、何日間も水を飲まないこと、自分の体に鞭打つこと、乳に傷をつけることを実践するよう求めた。その後、彼女は成長し、夫を迎えるべき年頃になった。天使は彼女に肉欲の想いをもつことを厳に禁じた。が、ある晩、レナータは幼年時代と同じようにマディエルをみずからの床に誘い込み、肉体関係を迫った。激怒した天使は火柱となり、彼女の肩と髪を火で焦がし、姿を消した。それから、彼女は鬱状態になり、来世で愛する天使に再会しようとして、壁に頭をぶつけるなどして自殺を図る。彼女が瀕死の状態だったとき、マディエルが再び現れ、「そんなにわたしたしの肉体関係を望むなら、7 週 7 日後、人間の姿でおまえの前に現れる」と予言する。2 ヶ月後、レナータは、オーストリアから来たと称する「白い衣装をまとった、薄青色の眼の（*голубые глаза*）、細い金糸ができたものかと疑われる金髪をもった」³¹ ハイニンリッヒ・フォン・オッターハイム伯爵（*Graf Heinrich von Otterheim*）と出会う。彼女は、すぐさま伯爵が天使の生まれ変わりだと信じた。彼女が調剤した惚れ薬の効き目があったか、伯爵は彼女に一目惚れし、二人はドナウ川の河畔にある伯爵の居城で一緒に暮らすことになる。しかし、二年目の終わり近く、突然、伯爵は憂鬱症にかかり、誰にも告げず城を

³⁰ Брюсов В. Соб. соч. Т. 4. С. 29.

³¹ Там же. С. 31. この記述は、モチュリスキイのベールイ伝に書かれた、バリモントとの失恋後、「彼女（＝ニーナ・ペトロフスカヤ）の前に現れたのが、金髪の巻き毛をした青色の眼をもった（*золотокудрий, синеглазый*）アンドレイ・ベールイであった」（*Мочульский К. Андрей Белый. Париж, 1955. С. 55*）という、ベールイの外画描写と一致する。

去ってしまう。正式な妻でないレナータは城を出るほかなく、両親のもとに帰ろうと思った。旅の途中、何度も悪魔が彼女を襲ったが、守護霊が「近いうちに騎士ループレヒトと出会うことになるだろう。彼が汝の人生の真の守護者になろう」という託宣を与えた。こうして、わたしとレナータは邂逅した。だが、後になって判明するが、彼女の告白話には多くの嘘が含まれていた。その晩、幼い兄と妹のように、二人はレナータの寝床で眠った。この第1章の出来事が、物語の発起点となる。

10. ループレヒトのサバト体験（第2-4章）

第2章から、レナータはループレヒトの旅の同伴者になる。わたしは、ノイスを経てロスハイムに帰郷する計画を放棄し、ライン河を下り、デュッセルドルフから、レナータの親戚がいるというケルンを目指す。道中、彼女はマイセン方言で話していた（第2章）。第3章では、デュッセルドルフからケルンへ渡すはしげぶね船の船頭から、ミュンスター叛乱の情報を聞き入れる。ケルンに到着後、彼女は「もう別れよう」と切り出すが、わたしは、貴女をハインリッヒと再会させることがおのれの騎士としての務めだと誓う。第3章の終わりには、ケルン滞在2日目、レナータと会ってから5日目に相当する。

第4章I末で、夜、わたしが「どうやったら悪魔の世界と接触できるのか？」と尋ねると、彼女は「あす水曜日に、定例のサバト（露 *шáбaт*, 独 *Hexensabbat*）が開かれるから、そこに行きなさい」と言う。第4章IIからサバトの場面。翌朝、レナータは膏薬をわたしの体に塗り、わたしは黒い毛深い雄ヤギに乗って、裸で空中飛行しながらサバトへ向かう。そして、レオンハルト師（*Meister Leonhardt*）と呼ばれている悪魔から黒ミサの儀式を受ける。悪魔は、角でわたしの左乳首の上に刻印をつけた。その後、裸の魔女たちによる輪舞と乱交パーティーが始まる。³² それから、ザラスカ（*Sarraska*）という魔女が、「ハインリッヒの行方は、おまえ自身が行く先で知れる」と予言する。サバトは、どこかの森の中の平原で開かれていた。そこで、わたしは乱交パーティーでの肉欲の炎が冷めやらぬレナータを発見する。レナータを呼び止めると、彼女は灌木の暗がりにも隠れ、つかまえることができなかった。この後、わたしはケルンの宿屋の小さな部屋で意識を回復する。つまり、このことから、レナータは天使の従順な僕しもべではなく、悪魔の手下である魔女であったことが判明する。先に書いたように、第4章IIと第15章IIの細緻なサバト描写がなければ、ブルガーコフは『巨匠とマルガリータ』を書き上げられなかっただろう。

³² サバトの描写は、中世の西欧人が信じていた事柄と一致する（例えば、膏薬を体中に塗った後の空中飛行、悪魔による徴の刻印、輪舞、野合など）。サバト（元来はヘブライ語に由来する語だが、日本語では「悪魔集会」「魔女集会」等と訳されている）に関しては、以下を参照。ジャンーミシェル・サルマン（池上俊一監修訳）『魔女狩り』創元社、1991年。

11. ケルンでのループレヒトとハインリッヒの決闘まで（第5-8章）

わたしはサバトの体験が忘れがたく、第5章で魔術について勉強しようと志し、古本屋でアグリッパ・フォン・ネットスハイムの『隠秘哲学について』三巻書に出会う。アグリッパ一行がボンに滞在しているとの報を聞き、第6章でケルンからボンへ馬で急行する。アグリッパとの会見は実現するが、「真の魔術とは、学問のなかの学問、もっとも完全な哲学の体現、魔術に身を捧げた様々な時代、様々な国、様々な民族の人間たちが啓示を通して教えられた、あらゆる神秘を解説した事柄だ」という謎めいた言葉を彼から言い渡されたただけだった。

わたしがケルンの宿屋に戻ると、第7章でレナータから、「町でハインリッヒを見かけた」と聞かされる。彼女は、ハインリッヒを殺すように命じる。その晩、彼女は初めてわたしに体を許した。わたしは彼女の道案内で、ハインリッヒが宿泊しているという邸宅に押しかけ、会談に至る。わたしは、少女（レナータ）を自分の居城に閉じ込めた罪責を問い詰め、決闘を要求する。だが、ハインリッヒはループレヒトに対して、「(階級的に)自分と対等の者からしか、決闘の申し出を受けつけられない」と拒絶する。しかし、町医者の子にすぎないループレヒトは、ハインリッヒに対して自分はおまえと同じ騎士だから、決闘の申し出を受け入れるべきだと促す。後者もこの提案には承諾し、事は決闘へと向かう。決闘の前日、レナータは「ハインリッヒを殺さないで」とわたしに嘆願する。わたしは、自分が死んで、彼女をハインリッヒと結び合わせようと決意する。16世紀前半の決闘は、剣によって行われた。19世紀のプーシキン時代のピストルによる決闘とは異なる。決闘の場面では、意外にもハインリッヒは剣術の名手で、傭兵として何度も戦闘に参加したことのあるわたしの胸を剣で突き刺す。しかし、とどめの一撃は与えなかった。

12. 決闘後のレナータ失踪、ファウスト博士一行との旅（第9-12章）

わたしは数日間、意識不明の状態に陥る。ここから第9章が始まる。レナータは、負傷したわたしを献身的に看護する。1534年12月に体調が回復すると、わたしはレナータと新婚夫婦同然の生活を送るようになる。第10章になって、炎の天使マディエルがレナータのもとに再臨し、「わたしの生まれ変わりだと、おまえが信じたハインリッヒ伯爵は誘惑者から送り込まれた者で、おまえを惑わし、おまえの魂を永久に滅ぼそうとしている」と告げる。この後、突然、第11章でレナータが行方不明になる。わたしがケルンを後にしようと決意して、ケルン大聖堂の前をうろついていたところ、ファウスト博士と従者メフトフェレスから呼び止められ、ケルンの観光案内をすることになった。二人とは意気投合し、わたしも彼らの旅の仲間に加わりたいと申し出る。願いは受け容れられ、彼らと

ともにトリーアへと出立する。

第 12 章（1535 年 3 月）に入ると、一行はヴィシエル山の峡谷に立つ城に招待される。現在、確かにヴィシエル城館（Schloss Vischel）というものが存在するが、ブリューソフは、ノイシュヴァンシュタイン城を建てたルートヴィヒ 2 世が音楽家ワーグナーをバイエルンに招いた逸話をここで再現しているのではないだろうか？城の主は、魔術に興味を寄せているアダルベルト・フォン・ヴェーレン（Adalbert von Wellen）伯爵だった。伯爵から魔術を実際に見せてほしいと請われ、ファウストはホメロスの叙事詩に出てくるヘレネーの霊を夜会で出現させる。

13. 修道院でのレナータの悪魔憑依事件、その後の顛末（第 13－16 章）

第 13 章 I で、朝早く、ファウスト一行はわたしを置き去りにし、旅に出発してしまっていた。わたしは伯爵にこれまでの自分の人生行路を告白し、彼の友となり、また秘書官ともなる。このとき、伯爵は実は人文主義を崇敬しており、ファウスト一行を城に招いたのも、魔術がペテンにすぎないことを暴くためだったと明かす。第 13 章 II のなかで、伯爵は、突然、トリーア大司教ヨハネスから、聖ウルフィラス女子修道院（das Kloster des heiligen Ulfilas）³³ で悪魔憑き事件が起きたので、至急、ヴィシエル城館に滞在したいとの急報を受けた。「聖ウルフィラス女子修道院」など、歴史上、存在しない。ウルフィラスとは、西ゴート語に聖書を訳した 4 世紀のドイツ人司教の名であり、この史実をもとに、ブリューソフが勝手に捏造したものだろう。アダルベルト伯爵は、大司教とともに、女子修道院に手勢を率いて出撃した。当然、伯爵の秘書であるわたしも同行した。旅中、伯爵は、修道院に新たに入ったマリーア（Maria；聖母の名）という修道女が悪魔にとり憑かれ、その現場に向かっているのだと、わたしに聞かせた。

第 14－15 章で、小説は物語展開の山場を迎える。第 14 章において、聖ウルフィラス女子修道院のなかで、マリーアに対する尋問が開始される。尋問に参加したのは、トリーア大司教、ドミニコ会修道士トーマス（露 брат Фома，独 Bruder Thomas），それに伯爵とわたしの四人であった。わたしは、マリーアを見た瞬間、もう 8 ヶ月も会っていないレナータであることにすぐ気づく。レナータもまた、わたしを認め、「ループレヒト」と呼びかけた。彼女は、「あんたなんか、天使と悪魔に同時にとり憑かれた哀れな修道女の気持ちかわかるの？」と叫ぶ。レナータの後に、もう 15 年近く修道院長を務める老齢のマルタが呼び出される。マルタの話によると、一ヶ月半ほど前、マリーアは修道院に入会した。その後、3 週間以上に涉って、彼女は奇跡を行った。彼女の掌にはキリストの磔刑を表わ

³³ Brjussow, *Der feurige Engel*, p. 337.

す聖痕が現れ、彼女は手をかざしただけで病人を治癒することができた。マリーアの奇跡話は、修道院内だけではなく、近隣一帯に広まり、彼女を慕う多くの信者が修道院を訪れるようになった。しかし、彼女を聖女だと認めない修道女たちは、彼女の部屋の近くで、壁を叩く音が聞かれるポルターガイスト現象が頻繁に起き、夜中、彼女と親しくしている修道女の僧房に輝ける天使の姿をした悪魔が訪れ、肉体関係を迫ったという報告をマルタに行った。尋問後、修道女全員が見守るなか、トリーア大司教によるレナータへの悪魔祓いの儀式が執り行われた。すると、激しいポルターガイスト現象が起これり、その場にいた修道女全員が悪魔にとり憑かれた。

この場面こそ、小説『炎の天使』の眼目だと筆者は考える。無論、このエピソードはルーダンの悪魔憑き事件を踏まえている。だが、悪魔憑きということが問題なのではなく、一人の修道女のヒステリーが集団に感染し、全員が狂的ヒステリーの虜とりこになってしまう恐慌状態を描き出すことに、ブリューソフの真の創作的な意図があったのではないだろうか。と疑う。狂躁時、敬虔なカトリックの修道女たちは、あたかもディオニュソス祭の狂女マイナデス（希 *μαϊνάδες*, 英 *maenads*, 露 *менáды*）のようになってしまう。ブリューソフの構想に、Вяч.イヴァーノフのディオニュソス論の影響はあったのだろうか？筆者には不明である。ともあれ、第14章の終わりで、レナータはこの集団的な悪魔憑き事件の張本人とみなされ、トリーア大司教が率いる兵士によって外に連れ出される。

第15章から、ドミニコ会修道士トーマスによるレナータの魔女裁判と拷問が執行される。その場に列席していたのは、またもトリーア大司教、トーマス、伯爵とわたしの四人だった。15～17世紀に魔女裁判に従事した主たる勢力が、ドミニコ修道会であり、異端審問は残虐を極めた。レナータは修道院の地下牢に監禁されていた。

最終16章に入り、わたしは、伯爵の計らいで、秘密裡に地下牢を訪れることができた。実は、伯爵は、マリーア修道女の潔白を信じる、ドミニコ会と対立するフランシスコ会（フランチェスコ会とも表記）出身の女子修道院長マルタと話をつけていた。地下牢で、わたしはレナータを抱き上げた。彼女は、最初、「マディエル、マディエル、わたしを救って」と叫ぶが、死の直前には、「愛するループレヒト、あんたがわたしのもとにいて幸せよ」と呟き、わたしも「レナータ！レナータ！おまえのことを愛している」と答える。その瞬間、彼女はわたしの腕のなかで息絶えた。

この場面は、一見、『ファウスト』第2部のグレートヒェンの獄死を連想させるが、ブリューソフのコンテキストでは、ゲーテに対するトラヴェスティー（英 *travesty*, 独 *Travestie*, 露 *травести́рование*）の機能が働いている。文学批評用語におけるトラヴェスティー（日本語には、この概念に該当する語がない）とは、ある作品の人物関係や筋展開や構成を巧みに模倣しながら、その作品を茶化す、貶める、馬鹿にする手法のことである。ゲーテ

の『ファウスト』では、^{えいじ}嬰兒殺しの罪を犯したとはいえ、グレートヒェンは清廉潔白な少女として描かれ、牢獄まで救出しにきたファウストによる脱獄の求めを拒絶し、絶命する。彼女は、悪魔と契約し魂の破滅に瀕したファウストを、彼の死後、天国へと導く。これは崇高なストーリーである。他方、『炎の天使』では、外面的には清純でキリスト教的な美德を^{じゅんしゅ}遵守したレナータは、地下牢で衰弱死するものの、実は悪魔とも姦通したことのあつる淫乱な魔女とされている。このようにブリューソフは、ベールイが崇拝したソフィア像やゲーテのグレートヒェン像に表白された「聖女」の理想を、徹底的に破壊しようとした。

レナータの死後、わたしはアダールベルト伯爵の城館に戻ったが、彼のもとを辞去し、故郷ロースハイムに向かう。そこで老齡の両親の姿を拝んだが、放蕩息子であるわたしにとって、彼らと顔を合わせる面目はなかった。また新世界に戻ろうと決心し、その資金を稼ぐため、フランスのストラズブールの商会で事務員として約3か月間、働いた。商事の関係でわたしは西欧各地に派遣された。そのとき、アルプス山中でハインリッヒと出会い、グルノーブルでは、またしてもアグリッパ一行に再会した。アグリッパは死の床に伏していた。死の直前、彼は *Monseigneur* (仏語で「わたしの主人」という意味；7巻選集では *Monseigneur* と誤記) と名づけられた黒い飼犬から魔法の首輪を外した。犬は川に飛び込み、アグリッパも死んだ。実際のアグリッパ・フォン・ネットスハイムは、(新暦)1535年2月18日、フランスのストラズブールで死去しており、小説内の時間よりも数ヶ月早い。仏人アンドレ・ナタフの『オカルティズム事典』によると、「彼は常にムッシュという黒犬を伴っていたが、それは悪魔にほかならなかったといい伝えられている」。³⁴

わたしはストラズブールで航海に必要な資金を調達すると、(旧暦1536年)春、スペインの港町ビルバオ(露：Бильбао，スペイン語：Bilbao)で新大陸に向かう船に乗り込む。金鉱が発見されたと伝えられるアメリカのフロリダ北部、「聖霊の川(露：река Святого Духа=ミシシッピ川)」の上流を目指して。³⁵しかし、船の出航は、荷積みや船員徴集のため、何か月も延引された。船の停泊中、わたしはこの手記を書き上げた。想像力を逞しくするならば、ループレヒトはグーテンベルクの活版印刷術を既に知っており、みずからの体験を刊行本にして世に知らしめることを願い、新大陸への渡航の前、あえて奇妙な内容の手記をヨーロッパにいる知人の手に託したと考えられる。

物語の最後で、わたしは次のように述懐する。もしわたしの人生が一年半前³⁶のデュッセルドルフまでの道中に再び戻り、レナータと遭遇していたなら、わたしはまた同じ愚行

³⁴ アンドレ・ナタフ(高橋誠他訳)『オカルティズム事典』三交社、1991年、232頁。この本では、1535年、アグリッパがドイツのボンで死去したという誤った記述がある。

³⁵ Брюсов В. Соб. соч. Т. 4. С. 301.

³⁶ ここから手記の執筆時期を特定できる。1909年版の刊行者序文だと、ループレヒトとレナータの邂逅は新暦1534年8月。その時点から一年半後だとすると、乗船は新暦1536年2～3月になる。

を犯し、悪魔集会に参加していたかもしれない。しかし、レナータへの愛は真実であり、彼女が亡き今でも、その於母影はわたしの心に^{おもかげ}燻^{くすぶ}り続けている、と。

14. 結論: どのように『炎の天使』を解釈すべきなのか?

初めに、この小説に対する三者の批評家の解釈に触れておきたい。

まずは、小説英訳の序文を書いた、『アウトサイダー』や『オカルト』等で知られているイギリスの批評家コリン・ウィルソンの解釈。ブリューソフは、ルーダン事件だけでなく、1611年、南仏エクサン地方の聖ウルスラ会(L'Ordre de Sainte-Ursule)女子修道院で起きた悪魔憑き騒動についても確実に知っていただろう。彼は、ホフマンとポーに影響され、超自然的・空想的な世界を創造することに熱中した。しかし、『炎の天使』では、最後まで神秘体験が現実のものなのか、それとも妄想にすぎないのかが、判然としない。むしろ、これは官能小説として読まれるべきではないか。宿屋で初めてレナータと出会って以来、ループレヒトは性的マゾヒズムを幾度も味わわれる。彼女がハインリッヒへの復讐を願ったときに初めて体を許したが、その後、マディエルが再来すると、彼女は彼を見捨てる。最後に二人が会見するのは地下牢のなかであった。満たされぬ性的欲望と神秘主義的盲信の混淆は、ハクスリーの『ルーダンの悪魔』と共通する。つまり、『炎の天使』は後代のフロイトの汎性説を先取りした小説と言える。³⁷

次に、アメリカのロシア文学研究者クリスティ・グロバーグの見解。彼女はロシア文学史の観点からこの小説を読み解こうとする。彼女の論を要約すると、以下ようになる。1890～1914年のロシアの「銀の時代」の文学者たち(特にロシア象徴主義者)は、「ヨーロッパでのオカルト(神秘学)の全般的な再興、19世紀末におけるロマン主義的な英雄としてのルシファー(英 Lucifer, 独 Luzifer, 露 Люцифер)やメフィストフェレスの再発見、19世後半の悪魔主義的なフランス象徴派・退魔派の抬頭」³⁸から影響を蒙った。当時のロシアでは、怪奇趣味が流行しており(この手の大衆本も数多く出版されていた)、ブリューソフもそうした世間の風潮に乗った。さらに、グロバーグは、『炎の天使』に関連して、仏人精神科医シャルコー(Jean-Martin Charcot; 1825-1893)の影響についても論考している。³⁹ シャルコーは、パリの女性専門の施療院であるサルペトリエール病院の院長として、悪魔にとり憑かれた、あるいは宗教的法悦に包まれたと妄想する精神疾患患者の

³⁷ Colin Wilson, "Introduction," in Ivor Montagu and Sergei Nalbandov, trans., *The Fiery Angel* (London: Neville Spearman, 1975), pp. xxiv-xxvii. この英訳本は、1930年に出た英訳のリプリント。

³⁸ Kristi Groberg, "The Shade of Lucifer's Dark Wing: Satanism in Silver Age," in Bernice Rozenthal, ed., *The Occult in Russian and Soviet Culture* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1997), p. 99.

³⁹ *Ibid.*, pp. 120-123.

発作のときの様子を、スケッチ画や写真を添えて、自身の著作で紹介した。19世紀末のロシアで、彼の発見は大きな反響を呼んだ。ブリューソフと親しかったロシアの高名な精神科医ニコライ・バジェーノフ（Николай Баженов）も、女性特有のヒステリーと性的願望の関連性について興味を寄せた。女性の精神に秘められた、これらヒステリーと性欲と悪魔憑き妄想の結びつきを、ブリューソフは『炎の天使』で虚構化した。

第三に、ブリューソフ、ベールイ、ペトロフスカヤのすべてと人間関係をもっていた同時代人ホダセーヴィチが綴った「レナータの最期」を検討する。⁴⁰ これは回想記である。1900年代のシンボリストたちにとって、生と創作の境が不分明になっていた。換言すると、彼らが現実には生きている人生と、彼らが創造している非現実の世界とが一体化してしまった。ベールイは、ペトロフスカヤに彼の理想である「太陽を身にまとった女」（Жена, облечённая в Солнце）⁴¹ を信じ込ませた。その後、ブリューソフは、彼女が信じてやまない「太陽を身にまとった女」の理想を汚すべく、悪魔学研究から得た魔術を教え込み、ベールイと敵対させようとした。その結果、ペトロフスカヤによるベールイ暗殺未遂事件が生じた。『炎の天使』は、この経緯を反映している。

最後に、この小説に対する筆者の意見を述べる。この小説の中心的主題は、ヒステリーの連鎖的な拡散にあるのではないか？ 一個人（あるいは社会集団の一部）のヒステリーが、あたかも中世のペストの蔓延のように、次々に他者へと波及していき、遂には集団ヒステリーと化し、全体が発狂状態に陥ってしまう。この心理過程に、ブリューソフは着目したのだと思う。西欧中世のユダヤ人大虐殺や魔女狩りなどは、集団ヒステリーの最たる例であろう。フーコーが『狂気の歴史』で指摘している通り、西欧では17世紀からヒステリー患者が社会から隔離され、19世紀になってようやく科学的な治療対象とされた。これは、狂気の集団感染を抑え込むための予防措置だったといえる。20世紀初頭のロシアで、ブリューソフは、みずから憎悪している功利主義がマルクス主義と変名し、ロシアの知識人層に急速に滲透していき、やがては国民全体を発狂に至らしめる事態を、悪魔崇拜と人文主義が聞き合っていた16世紀30年代のドイツの状況に仮託しながら、暗喩という形で預言したといえる。同時に、彼は、Вяч.イヴァーノフやメレシコフスキイと異なり、キリ

⁴⁰ Ходасевич В. Конец Ренаты // Огненный ангел. М., 1993. С. 365-376. ホダセーヴィチの象徴主義評価に関しては、以下を参照。三好俊介「ヴラジスラフ・ホダセーヴィチとロシア象徴派—回想記集『ネクロポリ』に関する一考察—」『SLAVISTIKA』第24号、2010年、1-15頁。

⁴¹ 新約聖書のヨハネの黙示録の第12章第1節に登場する言葉。その形象は、聖母マリアと同一視されることも多い。Вл. ソロヴィヨフが唱えた、終末に世界を救う「永遠の女性性」（Вечная Женственность）の象徴とされた。ベールイなどの神秘主義的なロシア象徴主義者はこれを崇拝したが、ブリューソフは完全に黙殺した。なお、現代ロシア語だと жена は「妻」を意味するだけだが、旧語的語義として「女」もあった。ダーリの辞書でも、「женщина, замужняя женщина; супруга, баба」と解説されている。

スト教的な篤信^{とくしん}をも蔑視していた。宗教も社会思想も否定するブリューソフが悪魔主義者でなかったことだけは確かだ。彼は、中世の人文主義的教養の枠内から悪魔や魔女といった事象を傍観しているだけで、交霊会のようなオカルティズム的な行為には一切、興味を示さなかった。筆者には、彼が一種の人文主義的な無政府主義者、あるいは文学的な唯我論者 (solipsist) のように思えてならない。いずれにしろ、ナラトロジカルな厳格性に裏打ちされた彼のフィクション創造の技術は、緻密で、精巧で、職人芸的である。

Магический мир Германии 1530-ых годов, сотворенный в романе В. Брюсова «Огненный ангел»

КАКИНУМА Нобуаки

В 1907-08 годах Варелий Брюсов (1873-1924) выпустил впервые в свет роман «Огненный ангел», опубликовав его в журнале «Бесы». Затем переработанный вариант романа с обновленным предисловием от русского издателя и тщательными примечаниями насчет культуры Западной Европы 15-16 веков был издан в 1909 г. в издательстве «Скорпион», где Брюсов состоял главным редактором.

Изображенные в романе события, такие, как одержимость Дьяволом людей и суд над ведьмой, слишком чужды для реалий дореволюционной России, чтобы современники Брюсова смогли в полной мере понять истинное значение этого произведения. Скорее на Западе смогли более высоко оценить замыслы автора романа и его познания о средневековой Германии. Согласно объяснениям Е. Чудецкой (Брюсов В. Соб. соч. В 7 томах. М. 1974. Т.4, С.342), роман был переведен на латышский, немецкий, чешский, испанский, болгарский, английский и другие языки. Представляется, что до сих пор в России недооценивается ценность этого романа. С другой стороны, можно высказать утверждение, что детали описания шабаша в «Огненном ангеле» оказали явное влияние на создание М. Булгаковым романа «Мастер и Маргарита».

Истолкование романа в основном связывалось с «любовным треугольником», возникшим в отношениях между Брюсовым, Белым и Ниной Ивановной Петровской

(1879-1928). В Германии в 2006 г. была опубликована книга, описывающая жизнь Нины Петровской (Kern L.: *Der feurige Engel: Das Leben der Nina Petrowskaja*, Berlin). На наш взгляд, трактовка сюжета романа «Огненный ангел», как своего рода репродукции этого любовного треугольника, не охватывает целостную картину мирозерцания Брюсова. Главные интересы автора романа устремлены к следующим трем аспектам: жизни Агриппы Неттесгеймского, преданию о докторе Фаусте и событию коллективного одержания демонами сестер в женском монастыре, которое произошло во французском городе Loudun в первой половине 17 века. Во-первых, Брюсов очень высоко оценивал Агриппу Неттесгеймского как выдающегося интеллигента, которому приходилось жить в Германии в 15-16 веках, когда противоборствовали новое течение мысли «гуманизм» и остатки средневекового «обскурантизма». Во-вторых, Брюсов интересовался скорее легендой о Фаусте, нежели трудом Гёте. Это может быть обосновано тем, что в предисловии от издателя упоминается о книге, изданной И. Шписсом (по-немецки Johann Spies) в 1587 г. В-третьих, Брюсов, который владел разными западно-европейскими языками и латынью, должно быть, был осведомлен об историческом факте, произошедшем в Loudun.

Однако, нам представляется, что истинные замыслы автора лежат несколько глубже. Может быть, роман пытается отразить действительность в России на пороге двух столетий. Брюсов ненавидел постепенное возрастание утилитаризма, который, потом получив популярность в форме марксизма, приводит к массовому безумию. Французский филолог Мишель Фуко, рассматривая европейскую историю, досконально изучал в книге «История безумия» (1961), как коллективная истерия распространилась в народах в среднем веке, как с 17 века изолировали в обществе якобы сумасшедшего в особое заведение. Очевидно, Брюсов мог наблюдать подобные общественные феномены. Наверняка, автор романа хотел проявить процессы, в которых истерия одного человека заражает другого по цепной реакции подобно распространению чумы, что в конце коцов приводит к массовому безумию.